

地域で育てる

子どもたちのさまざまな
居場所を訪ねます

高齢男性による地域子育て支援



塩谷侑佳 (地方公務員)

「Aぐらんぱの会」は、A市の「ぐらんぱ育児支援者養成講座」を受講した第一期生が立ち上げた、子育て支援を行う高齢男性の会である。保育園や小学校、放課後児童クラブでの支援活動や、地域の親子を対象としたイベントの開催を行っている。会員数は現在約四十名で、今回はそのうち十八名にインタビューに協力していただいた。対象者の年齢は、六十歳から七十六歳で、平均年齢は六十九・二歳。ほとんどの対象者が、退職するまで企業でサラリーマンとして働いていた。

子育て支援における高齢男性のメリット

Hさん「仕事の進め方みたいなものが、えー、時に生かされる場合があるんです。(中略)あの、必ずやったらアンケートをとって、アンケートの中身を分析して、まあえー、P D C Aで次につながるということを、基本はそれでやって

塩谷侑佳 (しおたに ゆうか)
お茶の水女子大学大学院に在学中、修士論文のための調査として2016年にこのインタビューを実施。

るんですよね。それは会社のときにたたき込まれたやり方で。」

Hさんは、会のイベントの際には必ずアンケートを実施して、次の活動につなげるようにするといった現役時代のPDCAサイクルを、現在の活動にも生かしている。

長年企業で営業を担当していたFさんは、以下のように語っている。

Fさん「営業がすごく生きてるなと思います。(中略) 他の団体とかかわることも苦にしないし、地域の人から声かけられても苦にならないし。それは、営業部門で人とかかわってたからだろうな。(中略) 専門的な知識ではなくって、そういうかかわり方が私の場合は役に立ってるんだらうなっていうふうに思ってますね。」

この語りの背景として、Fさんは地域のさ

まざまな団体に所属し、このぐらんぱの会と地域の他の団体をつなぐ役割を担っている。Fさんにとって、営業担当として多くの人とかわってきたことは、現在、地域のネットワークを築くことに役立つこととなっている。また、仕事の経験だけでなく、次のPさんのように、子ども時代の経験が現在の子育て支援の活動に生かされている人もいる。

Pさん「我々の活動を通じて言えることは、あのお金をかけずに、(中略) 自分の身体を、手指を動かして、あるいは手作りの、紙とか木でおもちゃを作って遊ぶっていう、こういう素朴な遊びのスタートとか原点というかな、そういったのをね、僕らは伝えていくことができるんじゃないかな。」

このようにPさんは、高齢男性の遊びの技術が今の親子に伝承されることに対して意味

を感じている。また、この会では、こういった遊びの技術を親子だけでなく現場の先生にも伝えようと、先生方を対象とした遊びのイベントを開いて活動の幅をさらに広げている。

またMさんは、高齢男性が子育て支援をすることの特異性について語ってくれた。

Mさん「ユニークさがあるかな。その、世間から見たときに。男性、シニア男性の子育てという。だから、どういうふうに言うのかな、特異な存在として主張できるというか表現できるというかね。認めてもらええるとか。(中略)だからあの、広めていくようなね、これでうまくいった広めていくと。そういう面白が今後あるなあと。(中略)だからまあそういう意味でも先駆者としての、なんか使命とかモチベーションとかね、ありますよね。」

Mさんは、高齢男性だけの子育て支援団体

がまだ全国的には珍しい団体であるということから、「先駆者」として活動していくことに対してモチベーションを感じていた。

子育て支援において高齢男性が抱える困難

Cさん「(支援先の)どこに行ってもそうだと思うけど、情報が少ないんです。(中略)このお父さんがどういう家庭環境にいるのかっていう情報は我々は一切もらってないですから。で、それを不満に思うときもあるんですけども、でもまあよくよく考えたら当たり前で。(中略)情報が少ないのはしょうがない。だから例えば、会社において、(中略)よく言うホウレンソウで、必ず部下には情報あげなさい、それから自分も情報を上司にあげましようということを心がけていたんで、情報が少ないと、非常に違和感とか不満を感じる、うん。でも実際にじゃあ、すべ

て情報開示しますって言われたら、対応できないですよ。」

Cさんは、情報の共有を重要としていたサ
ラリーマン時代のことがあるため、子育て支
援活動においても、支援する子どもたちの情
報を求めているところが、その情報を伝
えてもらえないと不満を感じることもあると
述べている。しかし一方で、子どもに関する
情報がすべて伝えられたところで、自分には
対応しきれないとも認識している。

Cさんは、現在においても活動を続けてい
る理由について、こう述べていた。

Cさん「どちらかというところ、今、義務感ってい
うかね、まあ一期でこの会を立ち上げたことも
あるんで、その立ち上げのときはやっぱりちょ
っと一生懸命頑張ったというか、会則とかも作
ったりして頑張ったこともあったんで。」

Cさんはこの会の一期生であり、会則を一
から作成する等、会の立ち上げに大きく貢献
していた。子どもと一緒に遊ぶことだけが子
育て支援なのではなく、このように、高齢男
性が活動しやすいように会の事務処理をきち
んと行える存在も必要だと、Cさんの存在か
らうかがえた。Cさんのような存在の働きに
よって、この会が現在も活動できていると言
える。

これまで地域の子育て支援に取り組む人を
対象としたインタビュー調査は女性を対象と
したものがほとんどで、祖父世代である高齢
男性に焦点を当てた研究はほとんどないのが
現状であった。今後は、他の関係職員や、子
どもたちからの意見も聞いていくことも必要
だろう。これを今後の課題として、地域にお
ける子育て支援について考えていきたい。